



撮影：鈴木理策

1956年生まれ。80年大阪外国語大学ドイツ語科卒業後、84年法然院第31代貫主に就任。85年境内の環境を生かし「法然院森の教室」を開始したことを皮切りに、アーティストの発表の場やシンポジウムの会場として寺を開放し、現代における寺院の可能性を追求。寺を預かる僧侶として、そして一市民として、個性を発揮できる活動を通じて社会的役割を果たそうと努めている。現在、きょうとNPOセンター副理事長、京都市景観まちづくりセンター評議員、京都芸術センター運営委員。著作に「ありのまま」(リトルモア、上記写真も)など

「あるがまま」に 願いに寄り添う。 弥陀のはからいに導かれ、

法然院 貫主 梶田 真章さん

京都東山鹿ヶ谷の法然院は、江戸時代初期に創建された古刹。閑静な境内では、アート展をはじめ、市民活動の場として、開放されています。その法然院貫主の梶田真章さんに、僧侶としての原点、そして今の社会におけるお寺の役割についてお聞きしました。

祖父と父の中道を行く

よく、「昔、お寺の子どもであることがいやだった」と僧侶仲間から聞きます。けれど、私は、幼いころからお坊さんというものに肯定的な印象を持っていました。

先々代の法然院の貫主が祖父で先代が父。二人は僧侶としては対照的でしたね。祖父は小僧からのたたき上げで、いわゆる昔ながらお坊さん。父は結婚したのがたまたま法

然院の一人娘だった母で、30近くになってから衣を着た人間。京都大学を卒業した哲学者で、もちろん仏教に造詣が深かったのですが、伝統的な僧侶である祖父からすると、学者をしながら片手間で僧侶をしていると映っていたのでしょうか、幼い頃には、父と祖父の間にある種の緊張感みたいなものを感じました。

祖父が往生して私が法然院に入ったのは、大学に入学しですぐ。遅刻の常習だった高校時代から一変、早朝からお勤めをする僧堂生活に入ったわけです。先にも言ったように、僧侶になることは私にとって既定路線でしたから、特に違和感も覚えませんでした。

お経を唱えられるようになった頃から、檀家さん宅へお伺いするようになりました。本来は住職がすべき仕事だという、父への多少の反発もありましたが、むしろ人との関わりが好きであった私にとって、僧侶にもとられるものは何か、深く考えるよい契機になりました。

もちろん祖父も父も尊敬しています。祖父は、教団という組織に向くのではなく、檀家さんとの関係を大切にくたために単立寺院とした。父は、開かれた共同体としての寺を築く、という考えを示してくれた。どちらがよいとい

寄り添った結果だと考えています。

應典院の活動、秋田さんのような行動力には敬服します。自らの主張をはっきりと示し、新しい扉を開く。世の中には、多くの人がいて、そしてそれぞれの「縁起」に生きています。だからおもしろいんですね。

全国7万を超える寺が、應典院のようになることは難しい。長い慣習の中での考えを捨てることは、なかなか容易ではないですからね。けれど、寺に何が求められているのか、何を願っているのかにしっかりと応えていけば、自ずと道は開けるはずだと考えます。私は私なりの坊主でいいと思っっているし、それぞれの僧侶がそれぞれでいいのです。願いに寄り添うのならば。

法然院には多くの若者も来られますが、今の若い人の状況には厳しいものを感じますね。私は、僧侶になることを選んだわけではなく、寺に生まれ自然とそうなった。けれど多くの人は、自分でやるべきことを見つけないといけない。ニートやフリーターが社会問題化する中で、よく仕事の「やりがい」や、仕事を選び取ることが論点になったりします。けれど、自分自身がやりたいことが何かと、始めからわかっているという幸せな人は、ごく一部なわけでしょう。

うのでなく、それぞれのよいところを受け継いでいけばいいと思っています。

父が59歳の若さで往生して、27歳の私が思いもかけず主となった。けれど、20、30代は、周りの人、環境に育てていただく時代。いくら自分がいきがっても自分の器以上のものは出ない。私がこの年齢で貫主になったのも、すべては阿弥陀様のはからいであると、ある種の開き直りの感覚からのスタートでした。

願いに寄り添うこと

法然院は、先進的な取り組みをしているように思われるかもしれませんが、決してそうではない。寺に願いを寄せ、寄る方々のそれぞれの願いに、寺を預かるが真摯に対応する、寄り添うことが大切だとのが考えが、今の法然院の姿なので。

京都には、歴史の古い寺院が数多くありますが、歴史とは建物とそこに集う人々の息吹が、連綿と織りなすものだと考えています。だから、アート展などに開放して、柱に傷がつくこともありますが、それも法然院の歴史。願いに

まずは何かをやってみる、経験してみることが大切なのではないのでしょうか。やりたい仕事というものは多くの経験の中から、自ずと見えてくるものだと思います。あまりに社会が性急に答えを求めすぎているのではないのでしょうか。

法然院は檀家寺であり、市民活動の場でもあります。人々が集まり、自由な立場で出会える場を提供することが、このお寺の役割だと考えています。ここに集う人の願いに、法然院を預かる者として、私なりにこれからも応えていきたいと思えます。



▲インタビューの1コマ

應典院は来年10周年を迎えるにあたって今年度より主幹を交代、前主幹の秋田光彦さんは住職に、そして新主幹に山口洋典さんが着任しました。山口さんは5月2日、新緑の美しい京都・鹿ヶ谷の名刹、法然院で、仏の教えに帰依する得度式を終え、正式に僧侶の仲間入りをしました。30歳と若い主幹を迎えた應典院が今後どのような変貌を遂げるのか、新旧主幹にお話いただきました。

新年度 秋田光彦住職・山口洋典主幹対談

應典院の時代をつなぐ インターローカリティ

新主幹「山口洋典（やまぐちひろのり）」の横顔



75年静岡県生まれ。98年入学の立命館大学大学院理工学研究科では都市計画を、02年入学の大阪大学大学院人間科学研究科では社会心理学を研究し博士の学位を取得。00年より6年勤めた財団法人大学コンソーシアム京都では研究主幹としてインターンシップ・プログラム作成などに取り組む。04年より、上町台地からまちを考える会の事務局長。

【好きな食べ物】カレー
【子どもの頃の夢】学校の先生
【得意技】ことは遊びによって場を和ませること。

▼第1章 應典院の場と事業

○自由区である應典院

秋田・應典院の歴史って、一言でいうと「場所」にこだわりつづけた9年間だったと思います。何かに専門化したり、カテゴリー化しないで、どう特性をつくっていきけるか。芸術とか市民活動を超えたその先にある概念、よく言うメタ概念として、最近のことですけれど、お寺であり、仏教が見えてきたように思っていますね。

山口・関わってきた職場である「大学コンソーシアム京都」や今も常務理事を務める「きょうとNPOセンター」は、基本的の間接支援のネットワーク組織でした。それらと比較すると似ている部分はありますが、絶対的に違うのは寺院であり、仏教を礎にして直接的な活動をしていることです。應典院は自らの立場を語る際、ある時は應典院寺町倶楽部で、またある時は宗教法人應典院でというように、その都度都度で聞き手に納得いただきやすい形で説明されます。また場所としての活用方法が、拠点として使用していただいた方々によって育まれたのではないかなとも思っています。ですから、應典院

の魅力とは、よくわからない空間であるところではないでしょうか？
秋田・仏の世界も不可思議で、よくわからないから（笑）。拠点として使用していただく方々に対して、受け皿そのものも色を変えながら、その都度、参加者の体温になじんでいくような場がいいなと思っていました。個々には自由だけど、それをさらに包みこむ大きな約束に守られている感じかな。

○ユニットでとらえる

秋田・最近の應典院の活動に、コミュニティシネマ※1があります。映画を公共財としてとらえ、そこから社会や

ことばのコラム

【コミュニティシネマ】地域における豊かな映画環境の実現を目指すため、「公共上映」の機会を通常の映画館以外

が設けること。コミュニティシネマセンターによる「コミュニティシネマ憲章」では、官民が一体となった新しい上映形態とされ、應典院もこれに賛同する。昨年6月より新作映画のプレミア試写やデジタル上映と講演・シンポジウムを組み合わせた「コミュニティ・シネマ・シリーズ」を3回実施。6月には連続して第4回（ダライ・ラマの般若心経）、第5回（石井聰互監督初期作品集）を上映。詳しくはP16へ。

歴史、地域を見つめ直す視点を養う試みです。主幹、新しい事業の構想は？

山口…「社会的ひきこもり」に挑戦したいですね。そのためにもユニット思考でいきたいと思います。今までの應典院はどちらかというと個人を単位にしていた事業が多かったように思えるんです。ユニットというのは一定の集団を一括りにするという意味です。「社会的ひきこもり」に挑戦したいのは、通常引きこもっている個人を対象に何らかの対策が必要とされているものの、むしろその人を取り巻く家族や仲間というユニットを捉えるべきだと考えたためです。方法としては中・長期的に関われたり、短期でも何日か連続で来てこそ完結する企画などがいいですね。こうした考えはコモンズ・フェスタの復活の仕方に関わってくるかもしれません。

秋田…ユニットならしめる際の編集能力とか、調合能力とか他の能力が必要になってきますね。再建以来、演劇の

應典院をひとつの看板としてきたんですが、「演劇のための演劇」に終始しがちなのが課題でもあったんだよね。

應典院は場所であって、施設ではない。場所として脱劇場化というのか、もう一つの劇場として脱皮するためにはどうすればいいのか、ずっと考えています。山口…新主幹が着任したからといって演劇に取って代わるものを発想する必要はなく、むしろ演劇プラスアルファとして何を織り交ぜられるのかどうか、です。まず、やるべきなのは應典院を使ってくださった劇団の皆さんにこうした話を問いかけてみることでないでしょうか？

秋田…対話と協働といわれる時代の中、演劇は沢山のことを表象化していると思います。演劇のただ中にいる若い人たちのなかに演劇を回路としながら何を気づき、発見していくのか。生き甲斐でも家族でも就職でもいいのだけど、とにかく演劇を演劇の箱に閉じこめてしまうのはもったいないと感じています。

▼第2章 二人の出会いと立ち位置

○出会い、なれそめ

秋田…山口さんと出会いのきっかけは01年に大学コンソーシアム京都でインターンの相談をした時ですね。翌02年9月に寺子屋フォーラムと一緒に仕事をしました。当時26歳の若者だったんですが、年齢を感じさせない構想力というか、世界を見つめる視線を感じたのが強烈な印象でした。震災チルドレン特有のものかもしれんですけど、二人の

仲が決定的になったのが(笑)、上町台地からまちを考える会で代表と事務局長のコンビで仕事をするようにになってから。山口さんの繊細な人格にふれてきました。

山口…僕は秋田さんのお話を始めて伺ったのが近畿労働金庫のシンポジウムで99年頃。伝わるかどうか知らんがとにかく伝える、というスタンスで話されていたのが印象的でした。目線が低く、孤高な人だと思いましたよ。パネリストとして呼ばれた以上はしゃべらねば、と語る様が、應典院の存在を強く植え付けたように思えます。悪い意味ではなく、そのころからずっと自信を持たねば、という弱さが伝わって

山口…住職が前に出ることがあってもいいと思いますよ。プロデューサーとアクターという部分で。映画の世界で言えば「ラインプロデューサー」としての全体の統括をしますので、ぜひ。



▲得度式の様子

るんです。俺は強い、できるんだ、という自信が漂っているのではなく、どうしたらやりたいことができるか、今こうなってるほしいのに、という願いから始まっている気がします。

○僧侶AとB、そして得度計画

秋田…そんな出会いから5年にして、昨日得度されました。おめでとございます。山口…法然院での得度式の後、ラジオに出演させていただいたので、そのとき梶田真章貫主にもお伝えしたのですが、僧侶はひと括りにできないし、僧侶をAとB^{※2}に分けるなら、僧侶Bを

ことばのコラム②

【僧侶A・僧侶B】

「アメリカの環境問題シンクタンク「ワールドウォッチ研究所」の創設者であるレスター・ブラウン氏の「プランB」になぞらえた発言。問題解決には通常のあり方(A)ではない代替案(B)が大切とされる、という捉え方。ここでは僧侶Aを法務に携わる一般的な僧侶、僧侶Bを法務にたずさわらない可能性が高いが三宝を敬っているれっきとした僧侶(浄土宗で言えば宗徒)を指している。

徹底して追求したいですね。

秋田…その僧侶Bという立場を私は「市民僧」と呼んできた。生き方としての僧侶であって、僧侶という職業ではない。僧侶は稼業ではなくて、ひとつのライフスタイルなんだと思う。仕事をもったまま、もつと得度する人がいい。1億2千万、総得度運動とか。

山口…得度計画ですね(笑)。

秋田…さらにもしろいことに、僧侶Bは僧侶Aを反転させる。いわゆるプロの僧侶Aの世界の方が生業のために俗化したり、密室化している面が著しいわけね。そこに僧侶Bが登場することで、いったい僧侶って何をする人なのか、そこが反転して、相対化される。信に生きるとはどういうことか、お釈迦さん以来の本義が問われるわけです。だから、山口さんの生き方は、日本中の僧侶Aを目覚めさせるものであってほしい(笑)。

山口…自分とは到底違うと思っ

人がいきなり出てきて、あなたの仲間だ、と言ってみる。相手は困るでしょうね。ただ、そういう場面を意図的に仕掛けていったらいい、ということでしょうか。

秋田…市民僧って、別に社会を変えるとか、そんな勇ましい活躍だけを期待しているわけではないんです。一人の人間として、学生でも職業人でも家庭人でもいいんですが、その生き方の基盤に仏教がある、ということ。お経が読めるとか、儀式を勤めるというサイドとは反対側から、僧侶の役割を尋ねていくのね。それを最初の山口さんの口説きで言ったんだけど、すんなり違和感なく受け取ってくれたことがうれしかった。

山口…違和感はないですよ。皆さんと一緒に、また應典院で同じときを過ごして心地よいし、違わない「和」に浸っていると思ってます。

秋田…それは仏教とか浄土教というよ

うな教えの理解とはちよつと違うよね。

山口…浄土宗や仏教はまだ見えないですよ。僕に見えるのは目の前にいる僧としての住職であり、お寺としての應典院です。ただ、そうした存在と和になつて以上、その背後にある教えに違和感を持ち得ないのではないのでしょうか？

秋田…これまで仏教には絶対的ヒエラルキーがあつて、組織的には教団トップから末寺へ、教学的には権威から一教師へと、卸されていく構造があつた。それを、逆流させるといふか、ミッシェンを河口において、そこから教団とか教学へ、逆に川上へ展開させる、ひとつのお寺の実験だと思つています。むろん、正しいかどうかわからない。でも、正しくないからわからない。うなら、仏教の下請け構造は変わらない。

○仏教徒としての第二性徴

山口…人間の成長と照らし合わせてみると、おそらく秋田さんが寺を飛び出したのは第二性徴、反抗期ですよ。第二性徴の部分ではお寺と共に育ち、お経もあげていたのではないですよ。恐らく僕は今が第一性徴ですから、やがて第二性徴で反抗期を迎えるんですよ、きっと。なので、反抗期があるかもしれないということ。前提にすると、第二性徴の時期をどう迎えるかは、これからの仲間によるのではないしょうか？先ほど問われた違和感というのは、今後成長していったとして、以前とは違う人や環境と和

みはじめて、そちらが心地よくなったときに元の環境とのあいだでお互いに嫌な雰囲気、つまり違和感が生まれてくる…。博士論文を執筆するにあたって大阪大学で学んできた「規範理論」*に沿って考えてみると、今の話はそんな風に説明できそうです。

秋田…ああ、なるほどね。違和感を表明するって大切ですね。例えば「なぜ仏教ではいのちあるものを殺してはならないのですか」というような問いは、ものすごく創造的な違和感だね。

山口…ルールがルールであることには何らかの文脈があるんです。あるルールがルールだとわからない状態が違和感ですよ。僕に市民僧としてどう

振舞うかが問われていますが、市民僧は市民であり僧侶であるとして。そうすると、ここは市民の立場としていいのか、徹底して僧侶なのか、といった二面性を持つことになりました。本来、市民僧と言うなら、市民僧という振舞い方をすべきですよ。そういう意味で僕はまだ僧侶のルールを知りません。なので、まずは市民と僧侶の両方のルールを知ってから、それらが合わさった市民僧の姿を追求していきたい。作法を知るだけではなくて、なぜそうなのかの意味を解釈していきたいですね。

秋田…腑に落ちないことを問うてもらえるような場でありたいと思います。

ことばのコラム

【規範理論】

社会学者の大澤真幸氏が『身体の比較社会学Ⅰ・Ⅱ』（勁草書房・90年）で展開している理論。通常、情報伝達として捉えられるコミュニケーションの問題を、何かと何かが通じ合う、合わない雰囲気が生まれるかどうか、という観点から迫る。比較的わかりやすい解説として、杉万俊夫編『コミュニティのグループ・ダイナミックス』（京都大学学術出版会・06年）や楽学舎（編）『看護のための人間科学を求めて』（ミネルヴァ書房・01年）などが参考になることを挙げておく。

○社会参加仏教

秋田・今、エンゲージド・ブディズム※4という世界の潮流があります。仏教はキリスト教やイスラム教と較べると社会的に晩熟だといわれてきた。個人の内面の開発だけやっていて、社会との交流が何もなくたてではないかと。日本では、既成仏教においては社会参加のあり方というのは始まったばかり。アユースとかビハラ21のようなNPOは個人のお坊さんが超宗派の組織を再編することで、社会参加仏教のモデルを作ろうとしています。もうひとつは地域におけるコミュニティな寺院がどうやって自立していくのか。寺という拠点、僧侶という人格を踏まえながら、仏教がどう社会参加、地域参加できる

のか、そこは大きな課題だと思います。山口・その話で重なったのは、自治体と行政との対比です。行政は地域の自治機能がするように調整役を担う存在で、自治を実現するにはその地域にまつわるあらゆる主体が関わらないといけないはず。市民は自らも生活する場所の自治を自治体と呼ばれる機関だけに委ねてはならない。70年代後半から地域では行政への市民参加の潮流が見られますが、同じ文脈が仏教の社会参加という概念に重なります。基本的にはお寺も自治体であって、檀家さんに支えられている一つの共同体です。もちろん、地域において自治体と住民との関係がうまくいかないときもあります。そのときに、それぞれの立場を行政と住民という対立軸に置くのでな

く、行政はどういう機能を、町はどういう魅力をも、転じて自分はどういう住まい方、暮らし方をするのか共に考えていくべきです。この枠組みを重ねてみると、決して寺院という単体に、また仏教という大きな存在に、それぞれの死生観をゆだねるだけではなく、関わっていかなくてはなりません。仏教が社会参加していくのであれば、受け入れる側である社会の態勢も必要不可欠です。相互のやりとりがなかったら、それは社会への介入であって参加とは言えないのではないのでしょうか。

秋田・今までの先祖仏教は、先祖を介在した寺と檀家の関係だった。しかし、社会参加仏教において、その中心軸とは何になるのか、いろいろ考えていかなあかんね。

ことばのコラム ④

【エンゲージド・ブディズム(Engaged Buddhism)：社会参加仏教】仏教徒や仏教団体による多様な社会活動、環境問題、

政治活動などへの参加、つまり仏教の積極的な社会的姿勢を指摘するために使われる用語。西洋で、現世に無関心な宗教としての仏教のイメージがあり、それとは矛盾する現象としての現代仏教徒・団体の社会的活動への参加、といった新たな傾向を示すために使用されるようになった。

▼第3章

これからの應典院、抱負

○應典院のインターローカリティ

秋田・今後は、大学との連携が増えますね。大阪大学のサイエンスカフェの開催もあるし、山口さんも僕も大学で教鞭をとっている。色々な大学を回路しながら、應典院の活動が広がっていく。またそれ以上に、研究としての層をどのように厚くしていくのかというステージに取り掛かって行かなければならないと思います。地学連携とかよく耳にしますが、それがいったいどういうモデルなのか、日本の地域の新しい知

の基盤づくりも考えなくてはならない。山口・僕が果たすべき最大の役割は應典院のインターローカリティ※をいかに出していくかということ。應典院は現場で共に呼吸してその存在がわかる場所です。こうしたあるローカルな性質が、別のローカルな場所と通じ合う可能性をどう高めていくか。例えば行政とのインターローカリティかもしれないし、地域を越えて大学や企業とのインターローカリティもあるのかもしれない。法然院で得度式ができたように別のお寺との共鳴する関係や、時代を超えて應典院の実践がどこかに貢献できるというインターローカリティがあるかもしれない。風となつて去る者もあれば、土となつて遺るものもある。その両方で風土ができる。

秋田・なるほどね。應典院の今までは風の10年間で、これからは土の10年間ということがいえるのかもね。

山口・僧侶Aが市民と過ごしてきた10年に対して、僧侶Bが入っていく10年でもあります。僧侶Bに市民僧というこゝとばを重ねるなら、これもインターな中間的な感じですよ。市民と僧侶の間を取り持つ役割は非常に大きいと思う。

秋田・大学との連携に関して今後の抱負を聞かせてくれますか。

山口・大学は社会で技術が伝承されていく際にその水準を認める存在としてイタリア・ポローニャで生まれました。これになぞらえると、應典院が應典院であることを社会で認めていただくために、多彩な大学との関わりが必要だと思っています。同時に、お寺を通して大

ことばのコラム ⑤

【インターローカリティ】ある現場の実践が導いた発見などが別の現場の実践にも役立つ知恵となつて伝播していく性質。

一言で言うならば「互換性」とも。グループ・ダイナミックスをはじめとした、実践的研究を取り扱う理論のなかで重要視される観点。自然科学領域の研究とは流儀が異なる人間科学の研究においては、研究者が現場の当事者とともに紡ぎ出す物語に伝播力が必要とされる。詳しくはP24へ。

シャシンとコラム①

2006.1.28 「仏教ルネッサンス塾」
於：青松寺（東京都港区）



宗教人類学者の上田紀行氏が塾長の青松寺の名物講座。「これまでの仏教の枠にとらわれず、時代に沿ったテーマを設定し、斬新なゲストと共に仏教の役割、可能性を探求しよう」と2003年からスタート。應典院は「日本でいちばん若者が集まるお寺～今なぜ仏教なのか、お寺なのか～」と題し、住職、スタッフとともに当時ブレンとして山口主幹も應典院の実践を報告、住職と汐見稔幸・東京大学大学院教授による対談も行われた。

シャシンとコラム②

2006.5.2 「山口洋典得度式」
於：法然院（京都市左京区）



正式な僧侶の仲間入りをするための通過儀式が得度式。京都の名刹・法然院の貫主・梶田真章師と主幹は、「きょうとNPOセンター」で理事を務める仲間というご縁もあった。本尊前の須弥壇（直壇）上には、二十五菩薩を象徴する二十五の生花が散華され、ゆきとどいた美意識にあふれた本堂にて秋田住職が誡師を、梶田貫主が証明師をつとめ、スタッフや小僧インターンなど、多くの関係者も看守るなか執り行われた。

シャシンとコラム③

2006.5.3 「新旧主幹対談」
於：應典院（大阪市天王寺区）



應典院2階の気づきの広場にて。緑が目まぶしい生玉の杜を借景に対談は終始なごやかな雰囲気で行われた。「昔の自分に似ている」20年前の住職と20年後の主幹の対談。二人のなれそめを話す段は、まるで恋が成就した年齢差のあるカップルのような感じ。見詰め合う二人、住職が「震災チルドレン」と言えば、主幹が「プロジェクト40」と、それぞれのことば遊びを記録の役割を担ったスタッフも楽しむ。文字化できなかった奥深い話も多数。

学の専門知が生まれるよう、共鳴する関係を構築したいです。
秋田…大学との連携を、単なる應典院のブランドのひとつに終わらせないよう、重心を据えて取り組んでいきましょう。

○地域で「いのち」を包みなおす

山口…先ほどユニットについて話しましたが、プロジェクト40[※]と名付けた発想があります。まず、ユニットの平均年齢が40になるように意識する。簡単に言えば、そのユニットにいくつもの特徴が見られるよう、多様な参加者を集めるということです。
秋田…中でも少子高齢化だから、いろ

んな世代をつなぐということ？
山口…まずは世代間交流ですが、男女という性別、またアジアという国や地域にも関心を置いていきたいんです。應典院はこれまでテーマを大切にしてきましたが、そのテーマを大切にしながら、人々のくくり方に制約条件を置いてもおもしろいな、と。
秋田…制約条件でいうと、これから應典院はもっと外へ出てほしいかもしれないね。
山口…それが今年1月の東京・青松寺での報告ですよ。ね。「應典院の東京進出」とホームページにありましたし（笑）。
秋田…私の最大の目標である、コミュニティホスピスも、いわば應典院10年か

期待しています。

ことばのコラム⑥

「プロジェクト40」

文中「震災チルドレン」が秋田の着想であるように、対談のなかで山口の着想として用いられたことば。「平均年齢を40にすれば少子高齢化を嘆く必要は全くないということなんです。確かに人口ピラミッドでは60代がふくらんでいる。しかしお年寄りが増えると言っても子どもがまったくなくなるわけではないんです。つまり、2007年問題で前期高齢者が増えるというのであれば、傍に若い人を寄せていくと何となくバランスは取れるはず。仮に60代の人50人、20代を50人足して割ると平均年齢が概ね40代になる。70代の人がいれば10代に入ってもらえばいい。40代が多ければ幼児や後期高齢者が入っても同じこと。ある集団の平均年齢を40程度に保とうということのスローガンにすれば、決して少子高齢化社会を嘆く必要はないのではないかと、そんな風に思っています。要は、工夫次第ではないかと。」（以上、対談より）

ら生まれるアウトリーチになるでしょうね。専門の施設とか人材とかいう枠内のことだけではなくて、地域に生死を取り戻しながら、どのように全体に開き、そして紡いでいくのか。まちの中で、若い学生ボランティアと高齢の末期者が普通に交流できるような、それもプロジェクト40のひとつかも。ホスピスは大蓮寺が中心の事業ですが、やはり應典院10年間の活動が底辺にあることは、とてもたいせつなことだと思います。
山口…つまり生と死のインターローカリティですね。ともに構想してきましょう。
秋田…今日はありがとう。これから

應典院、真夏の演劇の祭典「space × drama2006」を彩る6劇団が出揃いました。いずれも結成5年以内のフレッシュな顔ぶれ。さて、どのようなお祭りを仕掛けてくれるのでしょうか？ここでは、各劇団の横顔をご紹介します。

協働プロデュース公演

隕石少年トースター

「王様の犬とその側近と宮廷人」

2004年旗揚げ。同7月、旗揚げ公演インディペンデントシアタープロデュース#5「極」参加作品「そうだ、廃墟へ行こう」では観客投票によって、9団体中第2位で再演権を獲得。2005年12月には10日間のプレロングランに挑戦。隕石少年トースターのお贈りする作品は、ドキドキワクワクして最後にほっこりした気持ちになれるピクニックのような喜劇「ピクニック・コメディ」。初めて演劇を観る方々も楽しめる分かりやすい作品創りを目指している。



公演期間 6/29～7/2

----- ご挨拶 -----

初めまして。隕石少年トースターの脚本と演出をやっている山内直哉と申します。絶対話についてこれるコメディを目指しています。普段、映画は観るけど演劇は...という方々も、是非一度お越し下さい。隕石少年トースターでは、映画館のように好きな座席をお選びいただけます。そして約1時間半、楽しい時間を過ごしていただけることとお約束いたします。

東京ガール

「もけもけの気持ち」

2004年、大阪芸術大学の同期により結成。同年、「アリに行進」で旗揚げ公演をする。去年までは、大学内での活動だったが、外でもやってみたくてメンバーの意見が過半数を超えたため、今年からは学外での活動に挑戦。決まったスタイルを持たず、どうしようもないテーマを、いかにも凄そうにみえるよう努力するが、中途半端で終わる為、7割強の観客にわからないと言われていた。



公演期間 7/4～5

----- ご挨拶 -----

どうも、東京ガールです。我々は、演劇を中心に活動している団体です。演劇は大変です。がんばって活動をしているのですが、学生の為か、いろいろ足りない部分があることを痛感します。毎日が驚きと発見の連続です。これからも、足りない部分を補いながら、演劇活動をがんばってみようと思います。よろしく、お願いします。

劇団 kuskus

「ロマンチックカーズ☆」

2003年1月、森ノ宮プラネットホールにて旗揚げ。専門学校時代の講師であった植田と、生徒の塩崎・小玉が卒業後、結成。小玉(k)・植田(u)・塩崎(s)の頭文字を取り「kuskus」と命名。本公演は年1~3回のペースで活動中。ちょっぴり切なくて、おバカなエンターテイメントハートフルストーリー「エンタメセツナチックコメディ」と題し、「子どもが大人になっても憶えている。そんなワンシーン」をモットーに創作を続けている。



公演期間 7/18～7/19

----- ご挨拶 -----

皆様初めまして。最近劇団員が一人増えて、メガネ率75%になった劇団kuskusです。space × drama2006の台風のメガネになるべく、劇団員、一同、いつもより、メガネを多くかけて頑張っています。今回は第6回目の公演になります。気になるメガネ率は劇場でお確かめ下さい。

France_pan

「咆哮マーチ～雨と鉛～」

2003年、作・演出の伊藤拓を中心に、演劇に興味も感心も無かった人々を集めて結成。シュールな会話を軸に、真面目と不真面目の中間地点を探り、揺らぐ身体、悲しき喜劇性、肩が脱臼、今日は休日、不甲斐ない人生、ペンペケペンペンと現代的/変則的に作品は展開される。美術家や音楽家とのコラボレーションも積極的に行い、現代における演劇的可能性を追求。本公演以外にも横公演・裸公演と独自の公演スタイルを持つ。



公演期間 8/1～8/2

----- ご挨拶 -----

宇宙と演劇をこよなく愛する皆様こんにちは。フランスパンの作・演出の伊藤です。今回は久しぶりにマーチングバンドします。タッタカタンと超絶技巧で、あははあははと超越です。くだらない事をくだらない人と真顔でやってみせます。さいご舐めても振ってもいいですが、吠えずに終わったら、ごめんなさい。

劇想 空飛ぶ猫

「夜光虫」

2004年11月結成。テーマは教えませんが。あるけど教えません。そもそも二百字程度で書いてしまうテーマなら、芝居にする必要がないですね。私たちには何もありません。きつとあなたも同じ。何もありませんが、何もありません私たちが、もし何かを感じただけの、とろけるような甘いテーマになるでしょう。



公演期間 8/8～8/9

----- ご挨拶 -----

『劇想空飛ぶ猫』です。さて、空猫がお贈りする演目は『夜光虫』となっております。高級ソープと寂れた温泉街を舞台に、娼婦・芸人・乞食・教師・学生・主婦がそれぞれに漂流をしましてセカイに取り残されていくのです。山奥にぽつんと足湯がある。殺し屋みたいな女とホームレスの男がいる。いや、いた。今は確かにいないんだから。それだけが確かだ。日常に忙殺される、その前に。ぜひご来場ください。

特別招致公演

特攻舞台 Baku-団

「机上・キラ・魔人・スイッチ」

2001年に旗揚げ。今を生きる若者の「生きる欲求=リビドー」を「エンターテインメント」演劇のノリで綴り、自らの作品を「リビドーテインメント」と称す。また「劇作」から滲み出る、少年の葛藤、焦燥感から来る青臭さから「童貞テインメント」とも評される。関西を拠点に演劇祭や福祉イベントに参加し、年3~4回の公演を続け、10代~20代を中心に注目を集めている。



公演期間 8/26～8/30

----- ご挨拶 -----

「人を殺してみよう」そんな興味から、僕たちは集められた。架空の人間について、思いつく限りの殺し方を机上で語り合う。これは、殺人をシミュレートする高度なリラクゼーションだ。「死ぬべき人間とはどんなものか」やがて、机上論はある一人の最悪な人間「死に値する人間」を皆の頭の中に生み出し…。『特攻舞台 Baku-団』がホラー感覚たっぷりに生と死を真剣に本気で机上で語ります。

「ザ・コーポレーション」

プレミア上映会が問うたこと



主催：應典院町倶楽部
 共催：同志社大学大学院総合政策科学研究科
 協力：アップリンク・シネ・マーズ・ed9e実行委員会
 後援：社会福祉法人大阪ボランティア協会
 特定非営利活動法人大阪NPOセンター
 特定非営利活動法人きょうとNPOセンター
 特定非営利活動法人関西国際交流団体協議会



映画は総合芸術であると同時に、多彩な技能と関心を有する人々によって成立する表現手段である。だからこそ、應典院では新たな上映形態『コミュニティシネマ』を事業の柱に据えるべく、2005年より、コミュニティ・シネマ・シリーズを展開してきた。

その第3弾として行われた『ザ・コーポレーション』もその例外ではない。吐山継彦氏（言葉工房）によってイベントのルポルタージュ（現場報告）としてまとめていただいた内容を中心に、各方面からいただいたコメントをご紹介させていただく。映画が、そしてこの映画会が問いかけたことは何だったのかを振り返ることにしよう。

【開催の趣旨】

企業の不祥事が相次ぐ日本社会において、今ほど「企業倫理」や「コンプライアンス」が根底から問われる時代はありません。CSR（企業の社会的責任）という言葉が巷間を賑わせるように、いまや「収益」だけでなく、「環境」や「社会」的側面も、経営の全プロセスに組み入れることが、21世紀の企業競争力の源泉となろうとしています。

それはまた、これからの企業経営にとって企業サイドからの変革だけでなく、その最大の顧客でありパートナーでもある市民サイドからの変革が求められていることの証左でもあります。

「資本主義社会サバイバルシネマ」と銘打った映画『ザ・コーポレーション』は、政治システムを超えてグローバル化した企業の正体を数多くの貴重な証言によって描いていますが、同時に、企業に完全に支配された私たちが、いまこの巨大な存在といかに向き合うべきか、多くの示唆を与えてくれる勇気あるドキュメンタリー映画です。

企業を変えることは、社会を変えることに他なりません。それは企業だけが負う責任ではなく、私たち市民一人一人の応答と参加の責任であり、両者の協働関係によるCSRはソーシャル・イノベーションの根幹に位置づけられるものといつていいでしょう。同時に、いま日本の新しい経営システムとして誕生しつつある、コミュニティビジネスや社会起業の透視図としても、この映画から学ぶものは少なくないといえます。

一方的な「企業糾弾」という壁を超え、企業の変革を通して、私たち市民に何ができるのか、この映画が新しいソーシャルイノベーションを考える貴重な契機となることを願ってやみません。

【映画「ザ・コーポレーション」概要】

最近日本でも話題になった、企業買収の際に問われる「株式会社は誰のものか？」という議論、法令を破り連続する企業の不祥事の「原因」、そして郵便事業の「民営化の是非」といった問題の答えを導いてくれるのが、この映画『ザ・コーポレーション』です。

本作は、カナダのマーク・アクバー、ジェニファー・アボットの共同監督により、ジョエル・ベイカンの『ザ・コーポレーション』わたしたちの社会は「企業」に支配されている』（早川書房）を原作として製作された長篇ドキュメンタリーです。

本作は、2004年サンダンス映画祭で上映され観客賞を受賞したのを始め、2005年カナダ・アカデミー賞の最優秀ドキュメンタリーを含め全世界の映画祭で25個の賞を受賞、そのうち10個が観客賞を受賞しています。またニューヨークでロングラン上映されたのを始め、世界各国で草の根的に上映され、多くの観客の支持を集めてきました。東京ではすでに昨年12月より異例のロングラン上映が続いています。

株式会社の誕生から、政治システムを超えてグローバル化している企業の正体を描き、現在の企業を一人の人格として精神分析を行うと完璧な「サイコパス（人格障害）」であるという診断結果のもと、すべては利益のために働く機関としての企業の、様々な症例を分析します。

これからの企業のありかたを考えるすべての企業人、市民に必見の作品です。

（以上 2006年1月11日の本事業の企画書より）

「然り」とひとりの市民が言った

吐山 継彦（言葉工房・代表）

3月10日（金）に行われた「企業と市民によるソーシャル・イノベーションは可能か」と題する、映画「ザ・コーポレーション」のプレミア上映会＋1時間程度のシンポジウムというイベントに参加した。カナダのフィルムメーカーによるこの映画はかなりの前評判で、應典院のホールを一杯にした百人を超える観客は、ほとんどが映画を目当てに来ていた人たちのようだった。

最近では珍しい二時間半ほどの長編ドキュメンタリーである。宣伝チラシによると、「まず、企業を一人の人格として『精神分析』するところからこの映画は始まります。さて、その診断結果は……」とあり、キャッチフレーズとして「資本主義サイバー・シネマ」と銘打たれている。

診断結果は、「サイコパス（精神病質・人格障害）」というもので、企業は「他人への思いやりが無い」、「人間関係を維持できない」、「他人への配慮に無関心」、「利

益のために嘘を続ける」、「罪の意識がない」、「社会規範や法に従えない」と断罪する。

よくなどはまず、このセンサーシヨナリズムと精神病質者（サイコパス）に対する差別的なニュアンスにちよつと引いてしまった。もちろん映画のなかに出てくる醜い多国籍企業について弁護するつもりはさらさないが、もし世界の企業全体が精神病質だと強弁するならば、「そんなことはないだろう」と常識的に考える人が多いのではないかと？

因みに、多くの電子辞書に入っているブリタニカ国際大百科事典によると、精神病質とは、「精神病ではないが、正常との中間状態をいう。あるいは人格の正常からの変異、逸脱をいう。疾病による人格変化は含まれない。（中略）いずれにせよ、精神病質なるものの概念の乱用は慎まなければならない」とある。最後の一文などはこの映画のためにあるようなものだ。

実はぼくは、映画が終盤に近づいたときある危惧を抱いていた。ひょっとしたら、これが終わったときに観客から万雷の拍手があるのではないかと……

「もしそうだったら、自分はこういう態度をとればいいのだろうか」

でも拍手は起こらず、シンポジウム司会者の「よくできた映画だと思った人は？」と挙手を求める質問に対して、数は半々に割れ、観客は淡々と自分の思い通りの意思表示をしていた。60年代後半なら、きつとみんな「異議なし！」と叫び、拍手が巻き起こったことだろう。

……と、瑣末事に対して悪態をつきながら、本筋ではこの映画が提起している問題については大いに関心もあり、「異議なし！」の部分もあったことを表明しておきたい。

国家の枠を越え、グローバル化、巨大化する企業（株式会社）が悪を為すとき、市民はそれをどうしたらいいのか、という問題である。この映画に描かれているナイキやウォルマート、GAP、ロイヤル・ダッチ・シェルといった企業の悪行は確かに許しがたいものである。それらをかき合いかんが告発し、改善・改革させるようにしていけるのか？ 映画の結論は、非常に単純で力強いものであった。

アクション！

つまり、市民一人ひとりが行動する以外にない、と。このことは後の「ダイアログ」の中でパネリストの田村太郎氏も言っておられたと思う。しかし、それを言われると、「困っちゃうなあ……」と思う市民も多いのではないだろうか。

インドネシアにおけるナイキの生産委託工場が法定賃金よりも低い金額で労働者を働かせていたばかりではなく、長時間の残業を強い、暴力まで振るっていた、と知っても、日本市民であるぼくらはどうすればいいのか、ということである。そりゃあもちろん、ナイキの日本支社（そんなものがあるのか……）にデモをかけたたり、悪行をあげくビラを支店前でまくこともできるだろう。しかし、ナイキだけでなく、ガールフレンドがおり入りのブランド「GAP」でも問題は持ち上がりつつある。いやいや、問題のある企業は他にもごまんとあるから、その一つひとつについて行動を起こすことは物理的にも不可能な相談だろう。

「チチチチ（突戸錠風）」でもアンタたちには、どの企業に対してもものすごく影響力を行使できるたったひとつの行動様式があるんだぜ！

つまり、悪さをした企業の商品を買わないことである。市民が巨大企業に対してできるもっとも効果的な行動は「不買」である。その理由は、企業の利益は商品やサービスを売って儲けることでしか産まれないからである。不買は、企業の生命線を断ち切ることになるから、不買者が多くなればなるほど、企業に対する影響力は強まる。

市民のCSRとの関わりの中で、もっとも重要だと思われるのは「消費者」としての立場である。なぜなら、消費者こそが企業の将来の命運を握っているからである。この映画のなかで、企業の利益追求や儲け主義が批判的に語られているが、もともと企業というのはそのような営利的存在なのである。だから、企業に対して「市民」としての立場から、過度に倫理や正義をかざすより、「消費者」としてのバイイングパワー（購買力）を徹底的に活用して、企業に市民的な価値を強要するほうが得策なのではないかと思う。

「企業と市民によるソーシヤル・イノベーションは可能か」との問いに対して答えるなら、「然り」である。

その理由は、企業も市民も少しずつ、良き方向へと絶えず進化（深化）しているからである。

例えば、多国籍企業の良質の部分は、BOP (Bottom of the Pyramid = 経済の最底層) を、福祉や社会保障の現場としてではなく、マーケットととらえ、最貧困層の人びとを消費者（顧客）に変えることによって、社会的イノベーションを実現しようとしている。（『ネクスト・マーケット』C. K. プラハラード著、英治出版）

また、インターネットを自家菜籠中のものとした地球市民たちは、自らのセクター（市民セクター、非営利セクター、第三セクター、つまりNPO/NGO）を絶えず拡充させつつあるし、市民一人ひとりのエンパワメントも着実に実現しつつある。

だから、悲観的になるのは止めよう。このイベント自体、應典院のコミュニティシネマシリーズの第3回目であると同時に、同志社大学大学院ソーシヤル・イノベーション研究コース新設の記念イベントであり、こんな形で仏教とキリスト教が協働するのも、市民セクターの進化（深化）以外の何ものでもないからである。この融合からどんなマジックが産まれるか、ぼくは大変楽しみにしている。（はやま・つぐひこ）

イベントデータ ● 「ザ・コーポレーション」プレミア上映会 2006.3.10（金）・雨 18:00～21:45 119名

近年、企業評価にCSRの観点が入り導入され、CSRへの取り組みが広い意味での企業利益や企業価値の向上につながるとして、持続可能な企業経営の重要なポイントになりつつある。企業と市民の協働を考えるとときに重要なことは、企業のマネジメント層が社会的課題や地域との関係に対してどのように関わられるのか、企業の持つ資源をどのように活用できるのかということに自問することであろう。また、地域社会において、企業だけでなく、市民や行政も含め、あるべき将来の姿（ビジョン）が共有化されれば、各々の資源を活用しつつ役割分担と協働ができるのではないかと思う。

（沢田裕美子・株式会社大林組）

この映画は企業人に対して、企業の社会的責任は何かということ突きつけている。権力と結びつくような結果になるか。また、広告についても考えさせられる。視聴率のみで効果計算されるやり方が今のテレビ番組をもたらしている。企業人といえども地域社会においては一市民であり、自らの評価軸を持っている筈である。ひとりひとりが企業人としては理念に基づいた仕事をなし、地域において成熟した市民として行動してこそ、豊かな社会につながっていくのであろう。

（前西繁成・松下電器産業株式会社）

「ザ・コーポレーション」プレミア上映会 各方面からのコメント （敬称略）

グローバル企業のトップですら自由ではない。企業の論理が人間の倫理と、かくも食い違っていることに気付いても、苦しげな弁明をするだけだ。問題はシステムなのだが、システムは理屈で動いているので、理屈を替えばシステムも変わる可能性がある。ただし、企業人の意識変革だけでは不十分だ、ということはこの映画は示している。消費者の位置から遡って、企業の論理の核心であるマーケットを変えていくのが確実なのだ。

（直田春夫・特定非営利活動法人
NPO政策研究所）

「ザ・コーポレーション」は、鉄道、放送、水道などの社会的共通資本を「株式会社」にばかり委ねて良いかを問い掛ける。「官から民へ」の「民」は「民間企業」の意味だけではない。「仕事」が官から企業に下げ渡されてしまうだけなら、私たちには「取り戻す」キモチが欠けている。「放送」を市民の手に取り戻そうと呼びかけたい私には、FOX事例は良い反面教材。見たい映画の上映を自分達でやっちゃうこの映画会も、取り戻そうとする人たちの仕事だったと思う。ご苦労さま、ありがとうございました。

（松浦さと子・龍谷大学）

今回の事業は同志社大学大学院との共催でした。なぜ仏教寺院がキリスト教主義の大学と、と疑問を抱いた方もいらっしゃるかもしれません。開催の背景には2006年度、同研究科(研究科長はダイアローグに登壇いただいた新川達郎教授)に新設されることになった「ソーシャル・イノベーション研究コース」があります。そして、そのコースで養成するという「ソーシャル・ドクター(社会のお医者さん)」というところをさしに共感、共鳴したことがあります。既に、寺院に籍を置く者(山口)が、「臨床まちづくり学」や「地域インターンシップ」という講義を担当していますが、今後、同研究科と学術協定を締結し、現場主義的教育研究の主体として協働的実践に取り組む予定でもあります。

既に、ダイアローグの内容も含めた、本事業の意味・意義については、本事業の後援団体の一つである、関西国際交流団体協議会の『NPOジャーナル』にて、應典院の立場でまとめられています※。したがって、ここでは当日のコーディネーターの立場に戻って、この『ザ・コーポレーション』という映画が問いかけたことについて述べさせていただきます。順番が前後するかもしれませんが、とりわけ、共催、協力団体各位には周知等で、また当日はボランティアのみなさんに円滑な進行へのご協力をいただいたことにお礼を申し上げ、稿を進めていくことにします。

※山口洋典・秋田光彦 2006 ソーシャル・イノベーションのためのコミュニケーションデザイン・映画「ザ・コーポレーション」に学ぶ市民社会の応答責任 NPOジャーナル(13) pp.52-53

併催ダイアローグのコーディネーターから見た 映画「ザ・コーポレーション」プレミアア上映会

コーディネーター 山口 洋典

●自利を利他に利他を自利に

映画を見て、米国でバインとギルモアという2人の経営コンサルタントが著した『経験経済』という書物があることを思い起こしました。地球環境問題が深刻化し大量生産と消費を繰り返す近代工業社会の終焉を迎えた今、企業が利益を追求し続けて行くには顧客に印象の深さを遺していくべきではないか、と提案した書物です。例えば、「(私もよく利用する)あるコーヒー店のグロバールな店舗展開が可能となっているのは、最早コーヒーを飲むことよりも、そのチェーンの店であればどの国のどんな店舗でも同じような雰囲気に入ることができる満足度こそが顧客にとつての価値となっている、という論理です。よって、今、企業には顧客に満足感を演出するためにマス・カスタマイズ(大衆向け特注対応)に取り組むことが薦められている、と説明します。

日本では堺屋太一さんが『知価革命』なる書物を1980年代に著していますが、企業の倫理がこれほど問われる今こそ、知性をもとにした経営価値の革命が必要です。そこで、自利利他を説く仏教の役割が見いだされます。近江商人の「三方よし(売り手よし・買い手よし・世間よし)」ではありませんが、市民も行政も交えて、共に社会の営みのなかに存在し、よい社会を創造する担い手でもあることを確認する上で、「マニュアル(手引き)」として位置づけるのではなく、むしろ「ドリル(問題集)」として、この企画、映画、そして寺院や仏教が活用されれば、うれしく思っています。

●絶妙のタイミング・巧妙なダイアローグ

物事や出来事にはタイミングが重要です。今回の企画は、耐震強度偽装問題、ライブドアショック、国会での偽メール質問など、まさに絶好の機会での上映会となりました。加えて、大阪ではシネ・ヌーヴォにて3月25日から上映されるものの、東京では12月10日に公開と時差があり、資本主義社会における中央と地方という構造が文化的側面でも反映されているのでは、という上映への衝動も、企画立案の推進力となりました。検討を重ねた結果、2時間半の映画の後、1時間のダイアローグにご参加いただく枠組みとなりましたが、当日、21時45分の閉会あいさつまで、ほぼ全員、約120人の方にお残りいただいたことに、企業を含んだ市民社会創造に向けたソーシャル・イノベーションの可能性を壇上にて実感した次第です。

ちなみに、大阪での公開が3月末と決まったのを知り、プレミア上映を企画し始めたのが12月の末でした。社会的起業やコミュニケーション・ビジネスの盛り上がりという機運に重なるつつ、単純な体制批判ではなく、企業の倫理や良心を捉えることができないだろうか、というのが上映の狙いでした。さらにはダイアローグの登壇者の人選を工夫すれば、新年度より應典院の主幹が交代するというお披露目の機会ともなるし、と、いくつもの「これはいける!」という直感がそれぞれに確信を導きだし、開催に至りました。ちなみに洒落で記した社長割引には6名の方が申し出られたのですが、今後の催しを考える上で、新たな仕掛けも習得できたと感じています。

●インテリゲンチヤ寺院映画への道

本映画は、「ザ・コーポレーション」であり「ザ・カンパニー」ではなかったことも意味深いところであり、形態としての「会社」ではなく、企業という存在にまつわる社会システムを取り扱ったことは注目に値します。この文脈になぞらえれば、上田紀行さんが「がんばれ仏教」と著しているとおり「日本仏教」を取り扱った映画も必要かもしれません。ただ、その際には「ザ・お寺」でも、あるいは英文法に忠実に「ジ・お寺」や「ザ・寺院」とするのではなく、「ザ・仏教(The Buddhism)」として、総体としての存在に着目されるべきとなる。無論、この妄想に近い構想が現実のものとなるかどうかは、映画には格別な思いを抱く秋田光彦住職の動向が大きく左右することを申し添えておきます。

最後に、当日のコーディネーターの立場から、現在の應典院主幹の立場に戻って、2006年6月に相次いで開催するコミュニティ・シネマ・シリーズの第4弾、第5弾について紹介させていただきます。コミュニティ・シネマ・シリーズの第4弾はまさに仏教を取り扱った映画『ダライ・ラマの般若心経』の上映と、上述した上田紀行さんをお招きした講演会を実施します。第5弾は秋田住職が秋田プロデューサーであった30年前に思いを馳せつつ、映画にまつわる制度・文化、教育、人材育成等々について深めるミニ映画祭です。また、次号サリユ49号は、特集として「コミュニティシネマ」を取り上げる予定ですので、あわせてご期待ください。

應典院のインターローカリティー

山口洋典（應典院主幹）

1. 実験的ではなく実践的な現場への問い： グループ・ダイナミックスの流儀

ある物事、出来事に関わる際には、その主体が掲げる「問い」が重要である。それは学者の研究に限ったことではなく、明日着ていく服、昼ご飯の種類、家具の模様替え、そうした日常生活のあらゆる場面もまた同様である。自らが関わるもの、こころと、どのような関係を結んでいくか、想定されうる選択肢に思いを馳せ、結果としてある方法が採られる。通常、いくつかの行為を重ねられた末に導かれたある結果は、社会からの刺激に個人が反応し続けたという連鎖によるものとされ、その刺激

に引き合うことに主体性がある、といった表現が用いられる。

「問い」には「投げかける」ということばがあてられるように、明確な対象が想定される。例えば、自問、というのは自らに投げかけられた問いである。しかし、そうした問いが社会を対象にした場合、問いを投げかける方法には既にいくつかの流儀が存在する。その流儀こそが理論（Theory）と呼ばれ、学問の世界、つまり学界を構成するのである。こうして学問の世界では「王道を行く理論」などと呼ばれるように、あるいはお茶やお花なども含めた「道」を極めることと同様に、「伝統的に妥当とされてきたことが、物事や出来事を説明する作法として位置づけられ、それらの作法を習得した上で現場に向き合う必要があると

される。

ただし、グループ・ダイナミックスの理論は、研究者が当事者のいる現場に問いを投げかける際、研究者とその研究の対象とのあいだに一線を画さないことを流儀とする。渥美(2001)が示しているとおりに、「研究は価値中立的ではありえず、研究の成果として、真なる知」が時代を超えて蓄積されたりはしないという立場を採る」(p.15) のだ。なぜなら、研究者が問いを投げかけるといことは、当事者の行為を何らかの形で左右するのであるから、そもそも研究者と当事者のあいだに一線を画すことはできないはずなのである。少なくとも研究室での実験ではなく社会での実践を対象とする研究は、限定された時期に、限定された場所で、限定された人々とともに行われる「ローカルな協働の実践」（実践家との局所的な共同研究）となる。

無論、こうした研究スタイル自体に「それが研究になるのか？」という問いが投げかけられることもある。この問いに対しては「なるかならないか、ではなく、するかしらないか？の問題ではないか」と、新たに問いを返すことにしよう。冒頭に挙げた、日常の衣食住にまつわる問いの例がそうであるように、日常の現場では必ずしも、問いに対して明快に唯一の答えが見つかからないときもある。そこで本稿では、生滅流転する現場で相互作用を引き起こしながら当事者に向き合う学問的な知識「グループ・ダイナミックス」という観点から、来年度10年周年を

迎える應典院という実践の現場に問いを投げかけ、「問答」ならぬ「問問」の連鎖のなから、よい実践を紐解く手がかりを見いだしていきたい。

2. 現場のローカリティー： 限定された時間、空間、仲間の性質への着目

米国の心理学者、ケネス・J・ガーゲンは「多文化の声により十分に耳を傾けるために、自らの伝統の何を堅持し、自文化へのこだわりをいかに緩和するか」が、研究の質を左右すると述べている（Gergen・1994）。通常「何かを科学する」という表現には、暗黙のうちに自然科学の流儀が採用されており、既往研究の成果とされる何らかの法則について、論理を前提にある仮説を立証させていくことが妥当とされる。しかし、現場の当事者とともに、よりよい未来を構想し設計していくためには、社会の有り様をまず受け止めて、それを実践家とともに評価していく「ローカルな協働の実践」こそが妥当ではないか。いささか急ぎ足であるが、詳細な説明は他の書物を参照いただくことにして（例えば、杉方・2001・2006、渥美・2001）、以上のことを、ガーゲンは「論理実証主義」に対する「社会構成主義」を理論的背景（メタ理論）とし、本稿では現場に「生成力」ある理論が紡ぎ出されることを妥当とする「人間科学」の立場を採っている、と表現する。

実際、研究者と当事者とが現場で向き合っている場面を目前に想像いただと、その現場の研究では、と同時に研究の現場では、主体が対象に向き合う諸条件はあまりに多様である。とりわけ、実践を重ねてよいアイデアを紡ぎ出し、それらの成果を広範に発信していくことが、よりよい地域、社会を創造する、とまとめてみると、そうした営みを成立させる「アイデア」や「人脈」は現場ごとに差異が出て当然である。グループ・ダイナミックスは心理学の中でも、人間と環境の関係を取り扱った「場の理論」で知られる、社会における集団の振る舞い方に着目したクルト・レヴィン (Lewin・1951) が祖とされ、「社会心理学」という流儀の一つとして位置づけられるが、社会に主要な関心が向けられていることを強調するためには「心理社会学」と言っただけが掴みやすいかもしれない。先行することは借りれば、大づかみに心理実験で傾向を見るマクロ生理学に対して、細やかに現場に没入して当事者と研究者が合作としてよい成果を導き出すミクロ社会学 (杉万・2006、¹⁴ p.14) のうち、後者の立場を採る。

グループ・ダイナミックスとはまさに、あるグループ (集団) が、ダイナミック (力動的) に変化する変化していく集合体の動態 (これを、「集合流」と呼ぶ) を研究する学問である。しかし、いくら現場で「多文化の声」に耳を傾け、その場にある世界に目を向けていくとしても、自然科学の知見で見いだされた

らのことばは、既に多くの方にとって、インターネットのホームページをはじめ、企画書や報告書、またチラシや会報、さらにはそれらが送付される際の封筒、ひいては新聞やテレビ等の報道でもなじみのあることばではないかと思う。應典院は時に寺院が地域社会に、時に寺町倶楽部という会員組織が会員を対象に、とその活動の枠組みであるから一概に整理することは困難であるが、概ねこのことばが應典院のローカリティー、つまり現場の魅力を端的に表現していると言えよう。

「ひとが、集まる」とは、人を集める引力があるということを伝えたいのである。ドロレス・ハイデンという米国の建築学者は、多民族・多文化社会であるサンフランシスコのまちを取材することによって、日常生活の風景から地域への愛着を抱くことを「場所の力」という概念を用いて説明する。應典院は、先般NHKテレビのE・T・V特集「お寺ルネッサンスの時代」でも、また東京の青松寺で應典院を紹介したときにも、重ねて「日本が一番若者が集まる寺」と謳われているとおりに、再建一年目の夏に行った演劇祭を契機にして年間約6万人の若者が集まり、さらに1998年に開始したコモンズフェスタをはじめとした表現者の真摯な姿勢が、應典院という空間で流れる時間の魅力とも言える「場所の力」を今日まで生み出し続けている。ちょうど「あいつが鍵だ」と、人がもののように取り扱われることがある反転として、主体の対象への行為を支える道具として機

物理的制約 (例えば、應典院は宇宙に飛んでいかないし、秋田住職は時速100キロで走ることはできない) を当然受けることを前提としている。このことは、渥美 (2003) が、生命現象や社会現象について扱っている「物語科学」として位置づけられ、さらに研究対象のあるべき姿を構想し、実践に結びつけていくという「設計科学」を志向する体系であると著していることも参考になる。ただし、その際に注意すべきは、実践的研究が現場に没入して多様な声を集めると言っても、それらを匿名性の高い語り (非人称的言説) に仕上げることが目的ではなく、ユニバーサル (普遍的) とは言えなくても、ローカル (局所的) な知識を探求して、前述のとおり、当事者と研究者が浸っている雰囲気やどんな性質であるか、どのように生まれてきたのか、これからどうしていくのか、今何をしようとしているのか、徹底して、限定された時間、空間、仲間の性質、すなわちローカリティーに向き合い、記述し、実践することである。

3. 應典院のローカリティー： 現場の魅力を紡ぎ出す

では、應典院にはどんなローカリティーがあるのか。とりわけ、「ひとが、集まる」「いのち、弾ける」「呼吸する、お寺」という、應典院が用い続けていることばに着目してみよう。これ

能している、建物としての應典院に人格が重なる。

「いのち、弾ける」とは、生と死が分断して取り扱われてはならない、とする死生観への関心をかき立てたいのである。鷲田 (2001) は、関心とは「テン」語で「あいだにいること」(inter-ness) を意味し、そうして誰かと誰か、誰かど何かのあいだにいる場所が「交感」されていくことが、よく「ボランティア」と言われる自発的な行為の原理となっていると述べている。通常、檀家がいて成り立つのが寺院であり、法事、葬式などをして得た浄財を運営に充てられるが、それらがいずれもない應典院は、場所を開いて、そこに集まる人々を現代的に救済していくあり方を模索した。そして、実際に、前述した若者に加えて、應典院を当初訪れたのは中高年の方が多く、秋田住職主催による月2回のトークサロンにいられた方々の知恵と行動力、つまり現世を生きる人たちの関心の「交感」が、その後の應典院の歴史たる歴史や文化を生み出していったことは、「現代版のお布施のかたち」となって、應典院という場所における活動の主体と対象、そしてその成果を多様なものにしてきた。

「呼吸する、お寺」とは、地域資源としての寺院が本来果たすべき役割を模索する姿勢をあらわしたのである。前章で述べた「物理的制約」のことに立ち返ってみれば、建物が呼吸するはずがないことは明らかであるから、このことばを隠喩 (メタファー) 表現として取り扱うことにするが、その際には、菅野 (2003)

が詳説するメタファーの作用のうち、「共同性を承認しあい、お互いが住むことのできる共同世界を作り出す、という作用」という点が参考になる。「609年にまとめられた應典院の「コンセプトブック」には、およそ「寺」にはなじみのないことばが網羅されているが、それらは「旧来の寺院が果たしてきた役割」という説明が加われば合点がいく、そんな糊代が丁寧につけられていたように受け留められる。つまり、あえて「呼吸する、お寺」という隠喩表現を用いることによって、應典院が社会的に果たすべきルールや、分業のあり方、また活動を支える道具としての性質など、すべてを包括して、よい成果を導き出していく拠点となっていくことを宣言したのだ。

4. ローカリティーからインターローカリティーへ： 應典院からの発信

日本で一番変わった寺と言えなくもない「應典院」、それは350年ほど続く寺院を、1997年に再建するにあたって、「墓場」「葬式」「丸儲け」といった固定的なイメージを打ち破ろうと決意したところから始まった。言えなくもない、ということとは言えないかもしれない、という可能性があることを含意している。なぜなら、既に9年の実践を経て、應典院も進化すると同時に、他の寺院、他の施設、他の主体も進化を重ねてきたはずである。

「二次モード」の顕在化を、ローカルな現場どうしのあいだで相互にしようということも言え、決して時を越え、未来永劫有効な知識として伝統を重ねていく言説の交換とはまったく異なる。なるほど、そういうことだったのか、と気づいて、自らが身を置く環境をよりよい雰囲気にしていくということ、決してそれは離れた場所と場所のあいだのみでなされるものではなく、仲間と仲間のあいだ、例えばスタッフとスタッフのあいだ、インターローカルでも必要なことである。

今回、このように記させていたしたのは、新主幹に着任というご縁をいただいたこの機会に際して、主幹が浸ってきた研究モードはどのようなものかを伝えさせていただくと同時に、研究モードから新たに應典院という雰囲気浸るためのようなことが言えるのか、という問いに向き合いたかったためである。そうした問いに対応すべく、サリュの一面に名付けた名前は應典院「解題」であり、今後も應典院を紐解く研究者たちの数珠繋ぎの皮切り役になれたとしたら幸甚である。言ひまでもなく、通常「縁結び」と言えば、男女の恋愛を指すと思われるが、仏教用語では「けちえん」と発音し、仏門に入ることを意味する。アーティストのANDOさんが2005年3月の「大阪・アート・カレイドスコープ OSAKA05展」にて着想したように、應典院(ouenin)をローマ字標記すれば「out eni(内と外)のあいだに en(円・縁)」があるという、ことば遊びを愉しめ

それらのあいだには、意図があるかないかは別にして、何らかの相互作用があったと捉えるのが素直な感覚である。

ここまで述べてきたことに対して、実践と研究とが架橋される上で、もっとも重要と言える観点が「インターローカリティー」だ。インターローカリティーとは、生々しい記録を少々抽象化して、他の場所・時代に伝播させていくための素材とすることを意味する。実践の意義を整理する上で、抽象さと曖昧さが時に混同されがちであるが、両者は全く異なる。曖昧にある事象を記録すること、もしくは曖昧にして問題とおぼしき事象を放置しておくことなど、当事者と実践家とともに現場で(研究という名の)実践に取り組む上で、次の一手を探る運命「協働」体である以上は、双方の信頼を揺るがせ、次の一手の展開可能性とも言える「最近接発達領域」(Engeström・1987)を狭めるためである。

グループ・ダイナミックスでは、お互いにそれまでは気づくことのなかったことに気づくことを「二次モード」に至る、と表現し、その気づかざる前提のなかで活動していたときを「一次モード」と呼ぶ。「一次モード」は「二次モード」になってはじめて、「なるほどそういうことだったのか」という気づく段階であり、日常会話では「腑に落ちた」ということばであらわされた瞬間が、「一次モード」から「二次モード」に変わったときである。インターローカリティーとは、この「一次モード」と

る雰囲気につきり浸りつつ執筆した、筆者による寺院と大学、仏教と研究との縁結びの証であり決意表明である。

【引用文献】

- ・ 渥美 公秀 2001 ボランティアの知：実践としてのボランティア研究 大阪大学出版会
- ・ 渥美 公秀 2003 ボランティア研究の展開：物語の設計 科学に向けた議論 大阪大学大学院人間科学研究科ボランティア人間科学紀要SYN.3.7-16.
- ・ Engeström, Y. 1987 Learning by expanding : an activity-theoretical approach to developmental research. Helsinki: Orienta-Konsultit. 山住 勝広・百合草 禎二・庄井 良信・松下 佳代・保坂 裕子・手取 義宏・高橋 登(訳)1999 拡張による学習：活動理論からのアプローチ 新曜社
- ・ Gergen, K. J. 1994a Toward transformation in social knowledge. 2nd ed. London : Sage. 杉万俊夫他(監訳)1998 文化の社会心理学：社会行動学の転換に向けて ナカニシヤ出版
- ・ Hayden, Dolores 1995 The Power of Place: Urban Landscapes as Public History. Cambridge, MA: The MIT Press. 後藤 春彦・篠田 裕見・佐藤 俊郎 訳 2002 場所の力：パブリック・ヒストリーとしての都市景観 学芸出版社
- ・ Lewin, K. 1951 Field Theory in Social Science. Harper & Brothers. 猪俣 佐登留(訳)1956 社会科学における場の理論 誠信書房
- ・ 菅野 盾樹 2003 新修辞学：反(哲学的)考察 世織書房
- ・ 杉万 俊夫 2001 グループ・ダイナミックスの理論 現代心理学一理論事典 朝倉書店 641-659.
- ・ 杉万 俊夫 2006 コミュニティのグループ・ダイナミックス 京都大学学術出版会
- ・ 鷺田 清一 2001 へ弱さのちから：ホスピタブルな光景 講談社

「ひと」と「場」の交差点……

應典院にしき

呼吸するお寺・應典院の、1月〜4月の活動記録です。関連のエンディング事業なども併せて報告します。

1 月

- 5日・新年互礼会。グループ全員が大蓮寺本堂にて新年の「同向」。
- 19日・京都造形芸術大学の舞台芸術学科で、應典院の「コミュニケーション劇場」の活動を就職が講演。
- 24日・昨年のカレイドスコープの報告書作成のためのヒアリング取材。夜は寺町倶楽部の運営委員会再度新年の方針を述べる。
- 25日・小僧インターンの日高圭平の「若者による仏教講座」。参加は3名だったが、なかなか実のある議論が。
- 27日・住職、池野、大塚、田中と

フレンとして西島宏さん、山口洋典さん6名で東京へ。夜は品川のおすし屋さんでパーティー。

- 28日・東京・青松寺「仏教ルネッサンス塾」にて、應典院の全貌を紹介。ゲストは東大大学院の汐見裕幸さん。満場の200名の聴講。
- 30日・スタッフ会議で、新年度より新主幹に山口洋典さんの新人事が発表。午後は住職が都市協会の取材で、阪大コミュニケーションデザイン・センター渥美公秀助教と対談。夜は大蓮寺で第一回死生塾。学びのネタのアイデア出し会議。

2 月

- 1日・石井聰互初期作品上映実行委員会2回目。DVDで初期の傑作「シヤッフル」を鑑賞。
- 6日・カレイドスコープで協働した、アートコンソーシアムの反省会。
- 7日・上町台地マイルドHOPEゾーン事業ための懇談会に住職が出席。大阪市住宅局の方々と今後の組織運営のあり方に向けて意見交換。
- 12日・大阪高野若生寺協同組合による文化祭開催。應典院協力事業。
- 13日・真宗大谷派堺組の講演、應典院の活動を住職が述べる。
- 15日・映画「コーポレーション」の試写会に住職と大塚が参加。
- 16日・いのちと出会う会。
- 25日・大久保英治さんの作品展を、住職と池野が見学。岡山県、奈義から津山を走破。

3 月

- 27日・死生塾第二回。住職・小僧インターンが参加する勉強会。「エンゼルメイクとグループ・ダイナミックス」と題して山口が問題提起。実は、一週間後の講演の予行演習。大阪市大の山口悦子医師などが論理的に「つこみ」知的な議論に「浸る」。
- 1日・なにわ人形芝居フェスティバルの準備会。三千仏堂で主な参加団体が集まって、気炎を上げる。住職が参加。
- 2日・同じく人形芝居の下寺町の運営委員会を開催。全寺院の住職らが集まって実施の最終確認。事務局担当の住職が進行。
- 3日・企業×セナ協議会のセミナーに住職と大塚が参加。
- 5日・「関西エンゼルメイク研究会」に参加。第二回死生塾の内容からの進化に住職感嘆。

4 月

- 8日・生駒市人権協議会の講演を住職が述べる。應典院の青少年活動について。
- 10日・應典院「コミュニケーション」第3弾「ザ・コーポレーション」満場の119名参加。
- 11日・大阪NPOセンターの社会起業家フェスを應典院で。シンポジウムに住職が参加。
- 14日・石井聰互の実行委員会3回目。新たに橋本鏡予さんがメンバーに参加。
- 15日・演劇祭の参加劇団との初顔合わせ。
- 16日・日経新聞の住職取材。
- 19日・ケアする人のケアのセミナーで、住職が分科会と全体会に出演。
- 21日・大蓮寺帰敬式。新主幹の山口も満行。
- 22日・春彼岸法要。山口、日高が奉仕。本堂ホールでは、大阪府のCBフードの授賞式挨拶を池野が行う。
- 27日・上町台地マイルドHOPEゾーン協議会の参加団体32が参

- 集、全体の方向性を確認する。住職が参加。夜は死生塾3回目。4月からの「ブツカカフェ」の構想を小僧インターン・日高が発表。学術的な側面からの質疑で血祭りが残る。
- 30日・山口の大学コンソーシアム京都退職記念講演会に住職参加。終了後の小宴で挨拶を述べる。新たな出発に期待。
- 1日・二代目主幹山口洋典が着任と同時に應典院フロア開始
- 2日・第10回なにわ人形フェスティバル。本堂ホールではタニメ「頭山」等上映。フジのみなみ若者多数。
- 3日・住職と主幹の年頭所感の述べられる。「慈悲と共生の社会化」利他的人間の育成」を目指す
- 4日・昨日から超博やごご歌うキネマ」公演。スタッフを招待したため。
- 5日・上町台地からまじろを考案する会
- 6日・事務所内の大改造開始。高津

- 宮に住職と主幹が挨拶。
- 10日・コミュニケーション・シネマについて住職より解説。公共上映の可能性を確認。
- 11日・space x data2006制作者会議。周知計画の議論でiPodを住職・主幹が提供するご宣言。
- 12日・小僧インターン日高圭平「ブツカカフェ」開催。テーマは「お金儲けは「悪」か?」
- 18日・本堂に新スピーカー到来
- 20日・第58回いのちと出会う会。ゲストは街頭紙芝居師・古山千鶴子さん。昭和初期制作の手描き紙芝居が披露される。
- 21日・アーツと仕事研究会スタート。1回目のゲストはCEILの弘本由里さん。
- 22日・共催事業「お寺deサイエンスカフェ」開催。テーマは「宇宙航

- 空材料から骨疾患診断・治療へ：自由な発想と役に立つ研究」。ゲストは黒越佑吉さん。阪大副学長なから、あえて「さむ」ついで呼ぶことがルールとされた。気軽な
- 対話の場。10月に第3弾を予定。
- 24日・小僧インターンと島蔵田翔君が挨拶。まじろ歳の初々しい青年。真夏の高校演劇の祭典「HAF」(ハイスクール・ブレイ・フェスティバル)の実行委員会
- 25日・JR福知山線脱線事故から1年。追悼法要。
- 26日・6月の石井聰互監督CC上映会のブレ企画がコラムムで。スタッフ3人参加。
- 27日・「石井聰互初期作品DVDボックス」特典映像として収録される秋田住職のインタビュー収録
- 28日・住職・主幹が午後(大阪府)大

- 阪市に挨拶回り。現代美術センターにも訪問。夜は大蓮寺にて「死生塾」開催。住職が問題提起。中世からの現代までの、日本仏教の変遷で、現代の仏教が抱える課題と可能性について語る。衣装と空間の演出が難しかったので、一回納得。
- 30日・上町台地からまじろを考案する会
- 理事会。今年度の事業方針等を確認。秋に空理で「まじろの学校」。

- 5日・上町台地からまじろを考案する会
- 理事会。夜は花見を兼ねて小宴。
- 6日・事務所内の大改造開始。高津

- 5日・上町台地からまじろを考案する会
- 理事会。夜は花見を兼ねて小宴。
- 6日・事務所内の大改造開始。高津

- 5日・上町台地からまじろを考案する会
- 理事会。夜は花見を兼ねて小宴。
- 6日・事務所内の大改造開始。高津

應典院寺町倶楽部
主催・共催の催し
ラインナップ

いのちと出会う会

第59回 5月18日(木)
「生きるとは夢を持って歩き続けること」
話題提供者：奥塚明さん

第60回 6月15日(木)
「再びいのち生かされて」
話題提供者：南吉一さん
〔「在宅ホスピスあおぞら」主宰・医師〕

第61回 7月20日(木)
「野宿から立ち直って」
話題提供者：よがふくさん
〔NPO法人BMG社会福祉サービス監事〕

※いずれも第3木曜日18:30~21:00まで
参加費1,000円

應典院コミュニティシネマ VOL.4

「ダライ・ラマの般若心経」

仏教最高の経典のひとつ「般若心経」の心を、世界で最も著名な仏教者・ダライ・ラマ14世がカメラに向かって分かりやすく解き、インド国内の仏教的な生活を送るチベットの人々を訪ね歩く秀逸なドキュメンタリー映画「ダライ・ラマの般若心経」上映。上映後は文化人類学者・上田紀行さんがグローバル仏教の未来を語るトークショーがあります。詳しくは同封のチラシをご覧ください。

- 日時：6月3日(土) 13:00 開会
13:30~14:40 映画「ダライ・ラマの般若心経」上映
15:00~16:30 上田紀行さんのトーク
*終了後、ゲストを囲んでワンコイン交流会があります(500円)。
- 参加費：1,800円(一般)
1,500円(会員・学生)
*参加予約はメール、FAXで受け付けます。定員100名になり次第、締め切ります。申込予約多数の場合には当日入場をお断りすることがあります。

應典院コミュニティシネマ VOL.5

「シネマロックデイズ&ナイツ IN 應典院

~石井聰互・監督生活30年の閃光~

ロック、スピード、バイオレンス…1976年、若者たちの熱烈な支持によってデビューした石井監督。当時、大量宣伝・大量消費型の大作映画がもてはやされる中、小さくても作家性に富み、独自の製作や上映を目指したスタイルは、現在のインディーズ・シネマの原点と言っても過言ではないでしょう。19歳にして独自の映画システムを創り上げ、8ミリから35ミリ、デジタルへとそのスタイルを自在に進化させてきた、その監督生活30年を記念して、初期作品群のデジタル版完全上映が実現。いま映画を目指す若者たちへ、そして、映画を愛するすべての人へ、この上映会を贈ります。

- 日時 6月23日(金)~25日(日)
上映プログラム
- ◎23日「ishii SOGO(爆裂)ナイト!」
Aプログラム 19:00~22:30
- ◎24日「完全制覇!石井聰互、監督30年の全貌」
Bプログラム 13:00~15:50
Cプログラム 16:30~18:10
Dプログラム 19:30~22:40
- ◎25日「映画、そして至高の物語」
Eプログラム 13:30~16:30
- 料金 Aプログラム 3,500円(パーティ参加費含)
Bプログラム 2,000円(学生1,800円)
C~Eプログラム 1,800円(学生1,500円)
※詳細は應典院寺町倶楽部まで。

今年も開催!「space × drama2006」

6月29日~8月30日の2ヶ月間、若手6劇団(本誌p14・15参照)による演劇公演が應典院を熱くします。昨年さらなる進化を遂げようとするS×Dの情報は、space × drama2006 公式WEBサイトにアクセスしてください。

<http://sd2006.net>

(5月下旬オープン予定)

★お問合せ・ご予約は……

應典院寺町倶楽部

FAX 06-6770-3147

メール info@outenin.com

應典院寺町倶楽部の
ニュースレター

サリュ
Vol.48

<次号 49号は…>

2006年8月発行予定

【特集】：コミュニティシネマ

寺院が映画に取り組む意義は何か?映画と演劇の違いは何か?映画を支える製作・配給・上映といった社会システムを再構築していくための次の一手は?應典院と映画にまつわる関係を、「ダライ・ラマの般若心経(劇場版)」と石井聰互初期作品上映会から明らかにします。

- 発行日 2006年5月22日
- 発行人 秋田 光彦
- 編集人 山口 洋典
- スタッフ 池野 亮光
大塚 郁子
城田 邦生
- 発行所 應典院寺町倶楽部
〒543-0076
大阪市天王寺区下寺町1-1-27
TEL 06-6771-7641
FAX 06-6770-3147
E-mail info@outenin.com
URL <http://www.outenin.com>

編集後記

10年を目前に、新年度應典院にもたらされた多くの変化のうち3つご紹介。

- その1. 毎日の應典院内部の動きとスタッフのつぶやきを綴るブログが立ち上がったこと。
- その2. スタッフルームが機能的で美しくなったこと。
- その3. ことば遊びの楽しみにスタッフ一同?目覚め始めたこと。

新主幹の登場から1ヶ月を迎える5月の應典院。薫風のように心地よい清新な風が吹いています。(大塚)

日々、應典院に集う演劇の仲間たちと語り合うと、つくづく、應典院が持つ「場」としての求心力を実感します。演劇に関わる若者たちにとって、この應典院は劇場を超えて、ある種、研鑽と実践の場であると、ある劇団の主幹はいいます。自ら創意工夫をもって、應典院という「場」と対峙する必要がある。だから、自分たちは、ここで演劇をするのだと…。今年も應典院舞台芸術祭「space × drama」の季節がまもなくやってきます。若者たちの創意工夫と魂の鼓動が、凄まじい熱気となって、真夏の應典院を灼熱の太陽の如くつつむことでしょう。(城田)

はじめての共同作業、ということばに違和感を抱き、大阪日日新聞のコラムでそのことに触れたことがあります。共同というのは、同じもの、ことが集められた、ということを目指すためです。應典院の主幹に着任してスタッフたちと行っているのは共同作業ならぬ協働仕事で、ちょっと違うもの、こと、ひとのつながりをうまくつけようと、それぞれ日々ことばを重ね、キーボードを叩き、身体を動かしています。これから定期的に鮮度の高い情報を載せて、皆さまのお手元にお届けしていこうとの決意を抱きつつ編集人に着任させていただいたこの「サリュ」、その発送にあつては共同作業のたまものであったりするのです。(山口)

自灯明 法灯明

弟子たちよ、おまえたちは、おのおの、
自らを灯火 [ともしび] とし、
自らをよりどころとせよ、
他を頼りとしてはならない。
この法を灯火とし、よりどころとせよ、
他の教えをよりどころとしてはならない。

仏教聖典「ブッダ・最後の教え」より

應典院寺町倶楽部の
ニュースレター

サリュ

Vol.48

Top Interview

弥陀のはからいに導かれ、
「あるがまま」に
願いに寄り添う。

1

対談…「新年度を迎えて」
應典院の時代をつなぐ
インターローカリティ

4

space × drama2006
参加劇団横顔紹介

14

應典院コミュニティ・シネマ・シリーズ
第3弾
「ザ・コーポレーション」
プレミア上映会が問うたこと

16

應典院解題

應典院のインターローカリティ

24

「ひと」と「場」の交差点
應典院につき

30